

叙述を基に想像しながら読む力を育てる国語科学習指導 ～考えを可視化する「付箋トーク」の位置付けを通して～

要約：

「知識基盤社会」の時代である現代においては、「生きる力」がますます重要になってきている。そのような状況の中で、読解力や言語力を高めることが求められている。第4学年の本学級の子ども達は、物語文を読むことが好きである。しかし、想像しながら読むこと、自分の考えを根拠を明確にしてつくること、本文中の言葉に立ち止まることに課題がある。その一方、ペアやグループでの話し合い活動については、役立ち感を感じている。

そこで、子ども達に叙述を基に想像しながら読む力をつけさせたいと考え、本研究主題を設定した。具体的には、次のような具体的支援を行い、研究を進めた。

① 「付箋トークⅠ」「付箋トークⅡ」の設定

学習過程の「つくる」段階に、個人の考えをグループで交流して練り上げるための活動である「付箋トークⅠ」を、「深める」段階に全体で共有するための活動である「付箋トークⅡ」を位置付ける。

② 単元を貫く言語活動の設定

単元を通して子ども達が学習意欲と課題意識を持続させ、場面の様子を想像しながら物語文を読み進めることができるように、単元を貫く言語活動を設定する。

③ めあての工夫

各単位時間の目標を子ども達全員が共有し、何をとらえればよいのか焦点化できるように、めあてを工夫する。

④ 板書の工夫

一目で読みの深まり、まとめが分かるように、板書を簡潔かつ構造的にする。

第4学年「一つの花」、「ごんぎつね」の実践に取り組んだ結果、次のような成果（○）と課題（●）を得た。

- 付箋トークⅠ、Ⅱを1サイクルとして積み重ねたことや、単元を貫く言語活動を設定したことは、子どもの意欲を持続させ、目的を明確にもって学習に取り組めるようにする上で有効であった。
- 付箋トークⅠ、Ⅱを「つくる」「深める」段階に位置付けたことは、子どもに叙述への立ち止まり方、叙述を基にした想像の仕方を身に付けさせ、想像力を高める上で有効であった。
- 付箋トークⅠ、Ⅱの板書や用紙を工夫したことは、叙述と登場人物の気持ちや、その変化を可視化し、子どもが因果関係をとらえる上で有効であった。
- 個の考えの変容をノートに残していく方法を考えていく。
- 読み取りが苦手な子どもをどのように言葉に立ち止まらせるか、読み取りが得意な子どもの役立ち感をどのように高めていくか等、個に応じた支援を工夫する。

キーワード：付箋トークⅠ・Ⅱ 可視化

1 主題設定の理由

(1) 社会的要請・現代教育の動向から

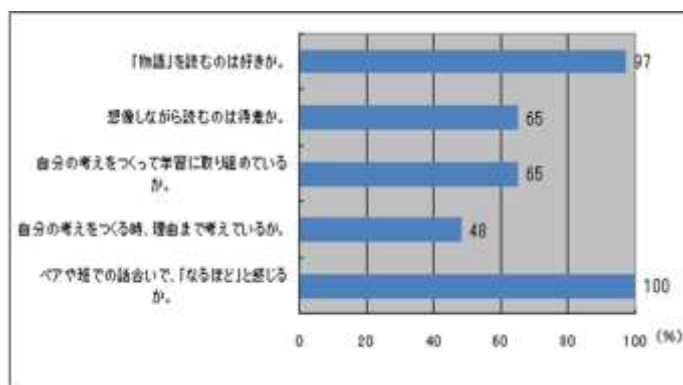
「知識基盤社会」の時代である現代においては「生きる力」がますます重要になってきている。そのような状況の中で、読解力や言語力を高めることが求められている。しかし、PISA調査など国内外の学力調査の結果では、我が国の子ども達は、思考力、判断力、表現力に課題があることが明らかになっている。本研究の目的は、子ども達の叙述を基に想像しながら読む力を育てることである。自分の考えを基に、具体物を通して言語活動を行うことは、自ら思考、判断、表現することにつながり、想像力を高める上で意義深いと考える。

(2) 国語科の本質から

小学校学習指導要領解説において、「思考力や表現力」は、論理的に思考する力、豊かに想像する力であると定義されている。また、「第3学年及び第4学年」「C. 読むこと」には、「ウ. 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。」とあり、叙述を基に登場人物の気持ちなどを想像し、それを友達と交流し合うことで考えの違いを感じたり読みを深めたりする活動が重視されている。このことから、本研究は国語科のねらいを達成する上で意義深いと考える。

(3) 児童の実態から

図1は、本学級の子ども達に実践前に行った意識調査の結果である。この結果から、物語に対する興味・関心は高いことが分かる。しかし、「想像しながら読むのは得意か」「自分の考えをつかって学習に取り組んでいるか」「自分の考えをつくる時、理由まで考えているか」に対し



【図1】実践前の意識調査（7月）

では、「はい」と答えた子どもの割合はあまり高くなく、想像しながら読むことに苦手意識があり、根拠を明確にして自分の考えをつくることができていないことが分かる。

また、4月単元「白いぼうし」のノート分析の結果、めあてに迫る叙述6つのうち、1つ及び2つしか取り出せなかった子どもは41%、1つも取り出せなかった子どもは9%であった。このことから、言葉に立ち止まる力にも課題があると考えられる。

一方、意識調査の「ペアや班での話し合いで『なるほど』と感じることがあるか」に対しては、全員が「ある」と答えており、話し合い活動の役立ち感を感じていることが分かる。このことから、本研究の個人の考えを基にグループや全体で「付箋トーク」を行って想像を広げる活動は、児童の課題の解決のために意義深いと考える。

2 主題の意味

(1) 主題「叙述を基に想像しながら読む力」について

① 「叙述を基に」とは

「叙述」とは、物語文において、筆者の表現技法や主題につながる思いが込めら

れた言葉、文、文章のことである。具体的には、地の文、登場人物の行動、会話、様子、情景描写のことである。つまり「叙述を基に」とは、上記の言葉や文、文章を根拠として読んだり考えをつくったりすることである。

②「叙述を基に想像しながら読む」とは

「叙述を基に想像しながら読む」とは、言葉や文や文章を取り出し、言葉を関連させながらイメージを広げ、「〇〇が～だから…だ。」と因果関係を明確にして変化する登場人物の気持ちを思い浮かべながら読むことである。

③「叙述を基に想像しながら読む力」を発揮させている子どもの姿

○ 叙述の中から課題解決の手がかりとなる言葉を取り出している。

○ 取り出した言葉を関連させて登場人物の気持ちや場面の情景を思い浮かべ、自分の言葉で書き表している。

○ 登場人物の性格、境遇、状況等と、登場人物の気持ち（行動）を結びつけ、「～だから…な気持ちなのだ」と因果関係をとらえながら読んでいる。

(2) 副主題「考えを可視化する付箋トークの位置付けを通して」について

①「付箋トーク」とは

「付箋トーク」とは、取り出した言葉や自分の考えを付箋に書き、グループで付箋を重ねたり、並べたり、分類したりしながら課題の解決に向けて話し合う活動である。本研究では、グループ交流として「付箋トークⅠ」、全体交流として「付箋トークⅡ」を設定する。

②「考えを可視化する付箋トーク」とは

「考えを可視化する付箋トーク」とは、机上や黒板上で、書いた付箋を具体的に操作したり書き加えたりしながら交流活動を行うことである。

3 研究の目標

国語科の物語文を読む学習において、叙述を基に想像しながら読む力を育てるため、付箋に自分の考えを書き、グループや全体で交流活動を行う「付箋トーク」の位置付けを工夫した国語科学習指導のあり方を究明する。

4 研究の仮説

物語文の学習において、各単位時間の学習過程の「つくる」「深める」段階に「付箋トーク」を位置付け、次の3つの具体的な支援を行えば、叙述に着目し、人物の気持ちを想像しながら読む子どもが育つだろう。

1. 単元を貫く言語活動の設定
2. めあての工夫
3. 板書の工夫

5 研究の構想

(1) 研究の内容

①「付箋に書く」＝「可視化」のよさ

「付箋に書く」という行為は、考えを可視化するために行うものである。可視化することで、次の効果が考えられる。

○ 向かうべき学習のゴールが明確になる。

- 発言が苦手な子どもでも、「書く」ことで考えを示すことができる。
- 5つの安心感を味わうことができる。

・傾聴…相手の言葉を受け止める。	・存在…そこにいた証が残る。
・共有…仲間になる。	・整理…内容が組み合わされていく。
・成果…今日やったことが見えてくる。	

②付箋トークのよさと位置付け

「付箋トーク」のよさは、次の3点であると考えられる。

- 自分の考えを付箋（具体物）に書くことで思考を可視化できる。
- 付箋を動かしたり、分類したりしながら話し合うことができる。
- メンバー全員が参加して思考を整理、深化させることができる。

本研究では「付箋トーク」を「つかむ」「深める」段階に位置付ける。

付箋トークⅠ 「つかむ」段階	個人の考えをグループで交流して練り上げるための活動である。市販の付箋紙を用いて行う。
付箋トークⅡ 「深める」段階	全体で想像を膨らませ、読みを共有するための活動である。短冊を付箋として用いる。

(2) 具体的な支援

子どもに目指す力をつけるために、以下のことに重点を置いて取り組む。

① 単元を貫く言語活動の設定

単元を通して子どもの学習意欲と課題意識を持続させ、場面の様子を想像しながら読み進めることができるように、単元を貫く言語活動を設定する。

- 課題解決の必然性を感じせ、身につけるべき力を生かして取り組めるもの。

② めあての工夫

各単位時間の目標を全員が共有し、何をとらえればよいのか焦点化できるように、めあてを工夫する。

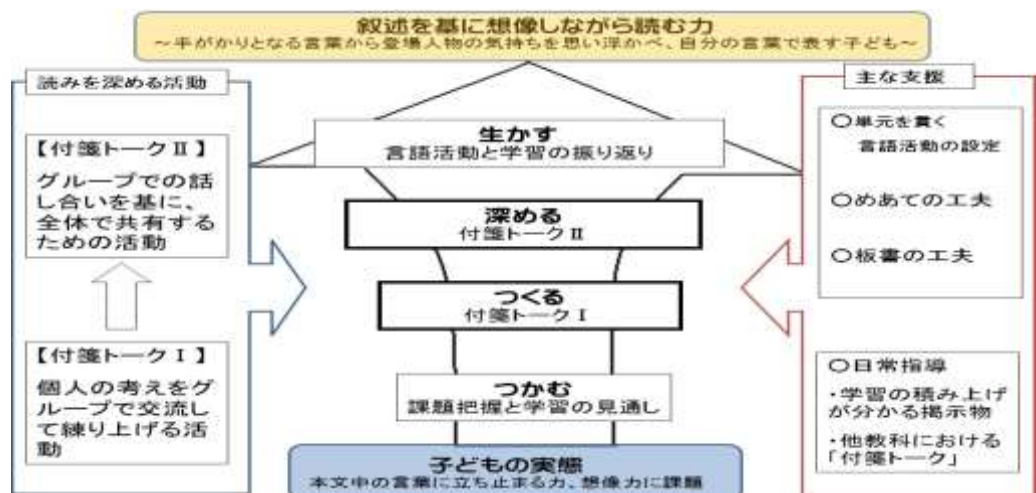
- 学習課題が明確に分かり、考えをつくりやすく、話し合う価値があるもの。

③ 板書の工夫

「付箋トーク」での成果を全体で共有できるような板書を工夫する。

- 付箋として、「短冊カード」の活用を図る。
- 一目で読みの深まり、まとめが分かるように、簡潔かつ構造的にする。

6 研究構想図



7 研究の実際

実践 I 第4学年「一つの花」(7月実施)

(1) 本単元の指導にあたって

本単元の指導にあたっては、ゆみ子に対するお父さん、お母さんの気持ちを叙述を基に想像しながら読むことができる子どもをめざした。そのために、「お父さん、お母さんのゆみ子を大切に思う気持ちがどのように変わっていくのかを読み取ろう」という読みのめあてのもと、「手がかりとなるお父さん(お母さん)の行動、様子、会話」と「そこから想像出来る気持ち」の2つを付箋に書いて交流し、ゆみ子を大切に思う気持ちの変化を人物関係図に表す活動を積み重ねていった。

(2) 指導の実際(本時9~10/12 出征するお父さんとゆみ子の別れの場面を詳述)

【ねらいとする子どもの姿】

出征するお父さんが一つの花にこめた、力強く幸せに生きてほしい、やさしい子になってほしいという気持ちをとらえることができる。

このような姿をめざして、次のような付箋トーク I、II を仕組んだ。

付箋トーク I	手がかりとなるお父さんの行動、様子、会話とそこから想像できる気持ちをそれぞれ付箋に書き、グループで交流する活動。
付箋トーク II	付箋トーク I で付加修正した自分の考えを、全体で交流し合い、お父さんの「ゆみ子を大切に思う気持ち」の変化を図に表す活動。

①つかむ段階

まず、コスモスの写真をもとに「コスモスの花」についてイメージを交流し合った。その後、コスモスのイメージと違う所に咲いていることを焦点化するために、「プラットホームのはしっぽ」「ゴミ捨て場のような所」「わすれられたように」という叙述を取り出した。そして、この叙述からは「力強さ」が感じられることを話し合い、「お父さんは、どのようなねがいを一つの花にこめたのだろうか。」というめあてを立てた。

〈考察〉

お父さんがゆみ子にあげた一輪のコスモスへのイメージを膨らませたことで、子ども達はお父さんのゆみ子への思いを考える見通しをもつことができた。

②つくる段階

この段階では、まず「付箋トーク I」の基になる自分の考えをつくらせた。その手順は次の通りである。

- 1) 手がかりとなるお父さんの行動、様子、会話を見つけ、黄色の付箋に書き抜く。
- 2) 書き抜いた叙述から想像できる気持ちをピンクの付箋に書く。

また、次のような方法で付箋トーク I を仕組んだ。

自分が書いた叙述と気持ちをグループで出し合い、友達と同じ考えは重ね、違う考えは並べながら付箋を貼っていく。(資料1)



【資料1】付箋トーク I の台紙

〈考察〉

付箋トークⅠでは、付箋は書けたものの、次のような課題が明らかになった。

- 話し合う目的が明確でなかったため、出し合いで終わってしまった。
- 時間が十分ではなかった。
- 叙述も気持ちも両方書かせたので、活動が多すぎた。

③ 深める段階

この段階では、一輪のコスモスの花に込められたお父さんの願いを共有するために、次のような手順で付箋トークⅡを仕組んだ。(資料2 板書)

- 1) 書き抜いた叙述を発表し合い、叙述を書いた短冊カードを板書上に貼る。
- 2) 叙述をもとに想像したお父さんの気持ちを交流し合い、教師が板書上に書く。
- 3) 出された気持ちの共通点を話し合っこの場面のお父さんの気持ちを焦点化し「お父さんは、一つの花に」という書き出しに続けて一人一人まとめをつくる。



【資料2】 深める段階の板書

〈考察〉

付箋トークⅡでは、多くの子ども達が考えを意欲的に発表することはできたが、次のような課題が明らかになった。

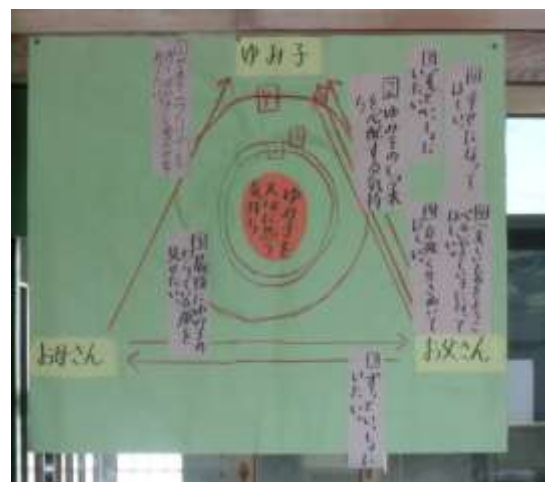
- 子ども自身の付箋を板書上に生かすことができなかった。
- 叙述と叙述を関連させられず、1対1対応に終始した。
- 子どもから出された考えを教師が無理に焦点化してしまった。

④ 生かす段階

本時でとらえたお父さんの気持ちをもとに「ゆみ子を大切に思う気持ち」がどのように変わったかを人物関係図に表し、「今日の学習で」を書かせた。(資料3)

〈考察〉

キーワードとなる気持ちを入れて「今日の学習で」は書けてはいたものの、多くの子どもが板書上の言葉をそのまま書いており、本当にお父さんの気持ちを想像できたかということについては疑問が残った。これは、活動をこなすことに精一杯で、読み浸らせることが十分にできなかったことが原因であると考えられる。



【資料3】 人物関係図

実践Ⅱ 第4学年「ごんぎつね」（10月実施）

（1）本単元の指導にあたって

実践Ⅰでは子ども達が付箋トークの仕方を学ぶことで精一杯だったため、本単元に入る前に、付箋を使ったグループ交流に慣れさせるよう、他教科でも付箋トークの活動に取り組んだ。本単元の指導にあたっては、ごんや兵十の気持ちを叙述を基に想像し、2人の心の距離の変化をとらえることができる子どもをめざした。そのために実践Ⅰの課題をふまえ、次のように手立てを改善した。

- ・ 学習の必然性をもたせるために、単元を貫く言語活動として、各場面のごんの気持ちを「ごん日記」に表す活動と、単元の終末に「後話」を書く活動を仕組んだ。
- ・ 毎時間の目的を明確にするために、付箋トークで話し合う内容を「(付箋やごんカード、兵十カードを用いて) ごんと兵十の心の距離を考えること」に焦点化した。
- ・ 考えづくり、付箋トークの時間を十分に確保するために、各場面の学習時間を、2単位時間を1サイクルとして読み取りを進めた。
- ・ 子どもの考えを板書に位置付けるために、短冊カードを付箋として用いて考えを書かせ、模造紙上で付箋トークⅠを行わせた。
- ・ 叙述は絞り込み、ごん（兵十）の気持ちのみを短冊カードに書かせ、活動をシンプルにした。

（2）指導の実際（本時8～9/17 ごんが兵十と加助の後についていく場面を詳述）

【ねらいとする子どもの姿】

つぐないをしている自分の存在に気づいてくれるだろうという期待が高まっていたからこそ、兵十達に気づいてもらえず落胆するごんの気持ちをとらえることができる。

このような姿をめざして、次のような付箋トークⅠ、Ⅱを仕組んだ。

付箋トークⅠ	ごんの行動、様子、会話から想像できる気持ちを短冊カードに書き、それを模造紙に貼ったりごんと兵十のカードを動かしたりしながら、ごんと兵十の心の距離についての考えを付加修正する活動。
付箋トークⅡ	付箋トークⅠで付加修正した自分の考えを全体で交流し合い、ごんの心の動きをとらえ、ごんと兵十の心の距離を共有する活動。

また、学習の進め方を常掲し、常に付箋トークⅠ、Ⅱの目的とやり方を確認しながら学習を積み重ねていった。

①つかむ段階

教室横に掲示した「心の距離図」（資料4）から、それまでの場面でごんが兵十に少しずつ近づいていったことを確かめ、「兵十についていくごんと兵十の心のきよりはどうなったのだろう。」というめあてを立てた。そして、ごんの行動を時系列に沿って確認し4つのカードで板書上に提示した。



【資料4】ごんと兵十の心の距離図

〈考察〉

心の距離図を使ってそれまでの2人の心の距離の変化を確かめ、本時学習場面の変化を予想させたことで、子ども達が明確に学習の見通しをもつことができた。

②つくる段階

この段階では、まず、次のような手順で個人の考えづくりを行わせた。

- 1) ごんが「したこと」1つにつき1つ以上ごんの気持ちが表れている叙述を見つけて学習プリントに書きこみ、全体で確認する。
- 2) 確認した叙述からごんの気持ちを想像して短冊カードに書く。
- 3) 想像した気持ちから、ごんと兵十の心の距離についての考えをプリントに書き込む。

自分の考えを書かせた後、次のような手順で付箋トークⅠを仕組んだ。

- 1) 個人で書いた短冊カードを叙述に沿って出し合い、気持ちを交流する。(友達からもらった考えは青ペンで短冊に書き加える。)(資料5、資料6)
- 2) 出し合った気持ちをもとに、ごんと兵十のカードを動かしながら2人の心の距離について話し合う。(資料7)

〈考察〉

ごんの気持ちのみを短冊カードに書かせたことで、叙述から気持ちを想像することに集中でき、全ての子どもが4～10枚の短冊カードを書くことができていた。

付箋トークⅠでは、「心の距離を明らかにするために気持ちを交流し合う」という目的を明確に示したことで、ただの考えの出し合いにならず、話し合いが深まった。また、ごんと兵十のカードを用いたことも考えを可視化する上で有効であった。

③深める段階

この段階では、次のような手順で付箋トークⅡを仕組んだ。(資料8)

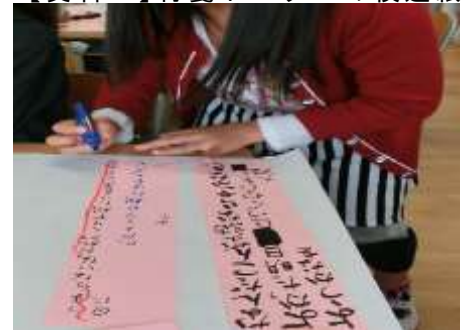
- 1) 想像した気持ちを交流し合い、短冊カードを子どもが板書上に貼る。
- 2) 「心の距離図」を指しながら2人の心の距離について考えと理由を交流する。
- 3) ごんの心の動きを、叙述をもとに全員で検討し、カードの高さで表すことで共有化し、まとめをつくる。



【資料8】短冊を自分で貼る子どもと付箋トークⅡの板書



【資料5】付箋トークⅠの模造紙



【資料6】考えを書き加える子ども



【資料7】心の距離を話し合う子ども

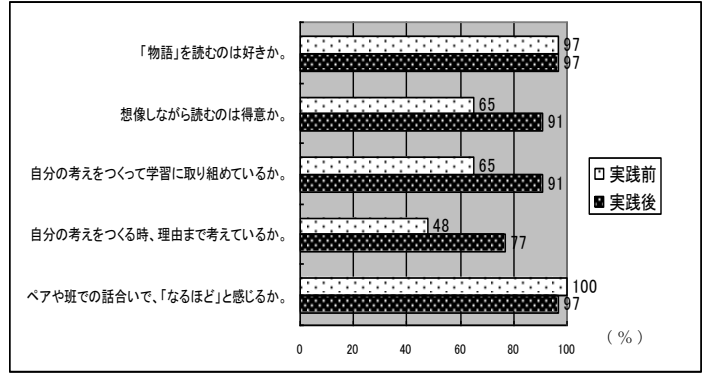
8 研究のまとめと今後の課題

(1) 全体考察

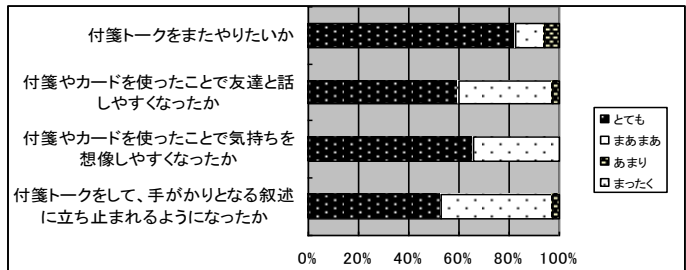
図2は、7月と12月に行った、子どもの意識調査の結果を比較したグラフである。

実践後には、「想像しながら読むのは得意」「自分の考えをつかって学習に取り組んでいる」「自分の考えをつくる時、理由まで考えている」と答えた子どもの割合が、それぞれ26%増、26%増、29%増と大きく増加した。その理由としては、「付箋トークで前よりもたくさん気持ちをカードに書けるようになったから。」「前よりもたくさん発表できるようになったから。」というものが多く挙がっていた。これは、付箋トークⅠ、Ⅱを1サイクルとした学習活動を積み重ねたことにより、叙述を基にした気持ちの想像の仕方が身に付き、自信を高めることにつながったためであると言える。

また、実践後に行った付箋トークに関するアンケート結果(図3)からは、どの項目でも90%以上の子どもが「とても」または「まあまあ」と答えており、子ども達が意欲的に付箋トークⅠ、Ⅱに取り組み、その有用性を実感していることが分かる。しかし、「あまり」と答えた子どもの中には、「(付箋トークは)難しい」「気持ちを書くカードをあまり書けなかった」と感じている子どももいたので、今後さらに個に応じた手だてを考えていく必要がある。



【図2】実践前と実践後の意識調査結果の比較



【図3】付箋トークに関するアンケート(12月)

(2) 研究の成果(○)と今後の課題(●)

- 付箋トークⅠ、Ⅱを1サイクルとして積み重ねたことや、単元を貫く言語活動を設定したことは、子どもの意欲を持続させ、目的を明確にもって学習に取り組めるようにする上で有効であった。
- 付箋トークⅠ、Ⅱを「つくる」「深める」段階に位置付けたことは、子どもに叙述への立ち止まり方、叙述を基にした想像の仕方を身に付けさせ、想像力を高める上で有効であった。
- 付箋トークⅠ、Ⅱの板書や用紙を工夫したことは、叙述と登場人物の気持ちや、その変化を可視化し、子どもが因果関係をとらえる上で有効であった。
- 個の考えの変容をノートに残していく方法を考えていく。
- 読み取りが苦手な子どもをどのように言葉に立ち止まらせるか、読み取りが得意な子どもの役立ち感をどのように高めていくかなど、個に応じた支援を工夫する。

〈参考文献〉・学習指導要領解説「国語編」文部科学省

・初等教育資料 平成25年5月号

・教材に「しかけ」をつくる国語授業10の方法 桂聖 東洋館出版社